

# 北方四島ビザなし交流

宗像 久男

## 国後島

どしゃぶりの根室港を出港してわずかに4時間半ほどの船旅を経て7月2日早朝、船足が止まった。国後島古釜布（ふるかまっぷ）の沖合に到着したようだ。一面霧の中だったが、町の明かりもちらほらと見える。

待たされること約2時間、霧の中から「はしけ」が近づいてきた。古釜布港には大きな岸壁がなく「はしけ」を使って上陸するのだ。「入域」手続きが終了し、「はしけ」に乗り移る頃には幸運にも霧が晴れて古釜布港の全容が見えてきた。あちこちに錆びた沈船などもあり、「これが港か」というのが第一印象だ。

羅臼山、それにこの時期はめったに見られないという北方四島の最高峰・爺爺岳（ちゃちゃ）岳（1822m）が雲の彼方に見える。やがて上陸。小さな岸壁にあふれるばかりの四輪駆動が並んでいる。新車ではなさそうだが、すべて日本車だ。何となく安心する。分乗して「日本人とロシア人の友好の家」（通称「ムネオハウス」）に向かった。

### “不法占領をわきまえていた、ロシア人？”

古釜布の町並みは、道路は舗装されておらず、古い木造の建物が多い。しかし、町から一歩郊外に出ると、手つかずの自然が眼に入った。どうも、ロシア当局は、つい最近まで“不法占領の事実をわきまえていた”かのように手を加えないまま島を放置していたようだ。車で走ると、まるで自衛隊の演習場のような錯覚に陥るが、島は空気も水もきれいで動物や植物達の楽園である。

だが、プーチン大統領になって「放置政策」が変更された。ロシア政府の大型開発プロジェクトが立ち上がったのである。

飛行場、公共施設、一般住宅地などの建設が進んでいる。確かに町のあちこちに周りの風景と違和感があるりっぱな建物が散見される。民間資本の投入も進んでいるようだ。

### 子供達はかわいらしく、若い女性は綺麗だ

国後島では、島民との交流プログラムをいくつかこなした。

まず子供達と一緒に実施した「漂流物調査」だ。日本、韓国、中国、ロシアから流れ着いているプラチックス製の漂流物は、子供達の興味を掻き立てているようで、一生懸命漂流物を集め、分類・記録まで手伝ってくれた。また、ロシアの学校では実施しないという「ミニ運動会」では、玉入れや綱引きに積極的に参加してくれた。世界共通かも知れないが、子供達はとてにかわいらしく、異文化に接すること素直に喜んでいるようだ。交流行事のハイライトは「ファッションショー」だ。珍しいこともあってか、若い女性に大人気だ。国後島は2回目だそうで、去年のモデル達に男性からのプロポーズが殺到してほとんど結婚してしまったとか。確かにロシア人女性は、若い時は顔立ちもスタイルも良く「にわかモデル」も様になっているのである。「夕食交流会」も盛り上がった。ロシア人は結構、歌が好きだ。「音楽には国境がない」のである。

わずかな時間だったが、精一杯のもてなしの心が伝わり、感激した。商店街も見学した。店はほんの数軒のみだが、中に入ると、冷凍の肉類や魚介類をはじめ、果物、衣料品など「物」はそろっている。単価は日本の半分ぐらいだろうか。島の平均給料が3万ルーブル（約9万円）ということらしいので、何とか生活できる水準なのだろう。

そして別れを惜しみながら離岸。わずか1日の滞在だったが、中身はとても濃かった。

## 択捉島

国後島から択捉島へは約10時間の船旅だ。途中、高田屋嘉兵衛が開いたという「国後水道」を通る。

潮の流れが速く、船が激しく揺れることもあるということだったが、幸い波も穏やかで真夜中だったこともあり、気づくことなく通過した。

5時「朝食の用意ができた」という船内放送で起こされた。択捉島紗那（しゃな）の沖合に着いたようだ。デッキに出ると、港のある内岡（ないおか）や紗那の町、そして元島民が「択捉富士」と呼んだ散布（ちりっぷ）山のほぼ全容が見える。ここも同じように「はしけ」が迎えに来て上陸。

団員全員で行政府に表敬訪問。「サハリン州で最も美しい択捉島によろこそ」という旨の歓迎の挨拶があった。日本側は領土問題に触れた挨拶をしたが、ロシア側は「触れたくない問題」として話題にしたくないようだ。

## 消え行く元島民の「痕跡」

続いて元島民の墓参となった。紗那の町外れにあるロシア人と共同の墓地、行ってみれば草が生い茂って何も見えない。

さっそく全員で草刈り。後から入ってきたロシア人の墓が中央に陣取り、隅の方に追いやられている墓石や倒れている墓石も多い。「申し訳ありません」という言葉とともに涙が滲み出る。皆、汗だくになりながら草を刈り、終了後全員で合掌した。

紗那の町で、廃墟と化したまま残存している「択捉島水産會事務所」や「紗那郵便局」も見学した。

北方四島には、強制退去を強いられるまで一万七千人を超える日本人が住んでいた。あれから65年の歳月がその「痕跡」を消そうとしている。

## 「開発」が進む択捉島

政府の大型プロジェクトや民間資本の投入で開発が進んでいるのは国後島と同様だ。

出来上がったばかりの「温泉施設」に案内された。水着を着けて温泉に入り、バーベキューもごちそうになった。なかなか美味しいがどれも塩辛い。北国のせいなのであろう。

「ギドロストレイ社」というサハリン州最大の企業が資本投資をしているサケ・マスの水産加工場や孵化場も見学させてもらった。北方四島は何と言っても水産資源が豊富だ。そこに眼をつけたのであろう。工場内は閑散としていたが、7月中旬から半年間営業を開始し、多くの労働者が島民はもちろん国内各地から「出稼ぎ」に来るようだ。

## 相互理解をはぐくむ島民との「交流」

国後島同様、択捉島でもミニ運動会やファッションショーを実施。特にファッションショーは、今年が初めてということもあり、「にわかモデル」達はコチコチに緊張感していたが、観客は大喜びで大変盛り上がった。

交流の目玉は「ホームビジット」だ。団員は四名前後のグループに分かれ、それぞれの受け入れ先に向かった。

私達のグループは内岡の測候所勤務のホメンコさん一家にお世話になった。若いご主人と18歳の娘さんがいる家庭だ。日本が建てた建物をそのまま使っているとのことだが、室内は意外に綺麗だ。内装やバス・トイレに至

るまで自分達で整備しているらしい。

グループの1人にロシア語が堪能で、ホメンコさんと旧知の人がいたので大助かり。会話のできない私達はひたすらロシアの家庭料理をいただく。それにしても彼女はよくしゃべる。一人でしゃべっている。女性がよくしゃべるのは国や民族を越えて共通のようだ(笑)。

陽気な会話の中に時々「本音」らしきことが出る。「島の行政の人達は何年か勤務して島を出て行くが、島の事は何も考えていない。島には今も何もない。本音を言えば、何もかも捨てて日本に行きたい」という話は特に印象に残った。やはり庶民感覚は政治家や官僚達とは違うようだ。

### 択捉島を離れる

択捉島最後の行事、「夕食交流会」となった。ホームビジットの後でまだお腹も空いていない時間帯ではあったが、盛りだくさんの料理や飲み物が用意されていた。型どおりの挨拶の後、プロのような女性達のカラオケショーが始まった。ロシア人と一緒に踊り出す人もいた。

日本側は、元島民の代表挨拶に続き、全員で「ふるさと」を合唱。また涙が出た。意味はわからなくとも「うさぎ追いしかの山・・・」の哀愁がロシア人にも伝わったようだ。最後に、青年団を中心とした団員有志で「阿波踊り」を披露したところ、ロシア人も加わり、大いに盛り上がった。

いよいよ択捉島を離れる時が来た。つい数分前まで一緒に歌い、踊っていた大勢のロシア人が見送りに来てくれた。人間の「感情」が国や民族の壁を越える瞬間だ。やがて船は、お互いに見えなくなるまで手を振り合う中、島を離れた。

### 国を挙げた「本気モード」が必要

千島列島の帰属問題の歴史的経緯は複雑だ。司馬遼太郎氏が指摘するように、西洋と東洋の領土や国境に対する概念の違いもある。

しかし、明らかに1855年に調印された「日本国魯西亜国通商条約」によって日本とロシアの国境を択捉島とウルップ島に定め、以来、北方四島は我が国固有の領土だ。

戦争は国と国の約束を精算してしまう効力を持っているのは人類の歴史が示す所であるが、百年も前の条約を一方向的に反古にするのはあまりに理不尽だ。

現地立つと、元島民の「痕跡」が消えつつある一方で「開発」が進んでいるなど、北方四島のロシアの「実効支配」が予想以上に進んでいるのがわかる。

「おやばと」8月号の「きずな」欄でも取り上げたが、放置しておけば、ロシア政府は、北方四島を固有の領土としてその正当性を益々内外に誇示し続けるだろう。このままでは向こうが1枚も2枚も上手なのだ。この厚い壁を切り崩して早期返還を実現するのは容易なことではない。

他方、島民との「相互理解」は相当進んでいる。日本人を信頼し、共存できると明言している島民の感覚はロシア政府とは違う。どうも解決の糸口はこの付近にありそうだ。

そしてやはり何よりも大事なことは、ロシア政府の強固な意志を凌駕する「本気モード」なのではあるまいか。及び腰の取り組みが足元を見られるのは必定であろう。

早期返還に向けて国を挙げての「本気モード」を期待したいものだ。

#### 北方四島が投げかけているもの

択捉島の沖合で船上から観た「夕焼け」が今も脳裏に焼き付いている。その時、ふと浮かんだ言葉が「国、大なりと言えども、戦いを好まば必ず亡び、天下安らかなりと言えども、戦いを忘れなば必ず危うし」という中国の古い兵法のひとつ「司馬法」の中に出てくる言葉だった。

「北方四島」が現在の日本人に投げかけているものは「戦争の重さ」だけではない。天下泰平を享受することに満足して将来への備えを怠ると、やがて日本列島全体が北方四島のようにになってしまう可能性がある。つまり、失われた領土を取り返すことも、領土を未来永劫に守ることも簡単ではないということも教えてくれているのではあるまいか。南の方ではその危機が迫っている。

北方四島が投げかけているものを1人でも多くの国民に余すところなく気づいてほしいと願って止まない。